■ 目次

NEW!
◆ 知財ニュース
◆ 津国先生とリンダの対談録—私を動かした言葉

知財ニュース

全国人民代表大会常務委員会による専利などの知的財産事件の訴訟手続に関する若干の問題にかかる決定

（2018年10月26日付第13期全国人民代表大会常務委員会第6回会議で可決）

知的財産にかかる事件の裁判基準を統一し、知的財産に対する司法による保護をさらに強化し、科学技術イノベーションの法的環境を最適化し、イノベーションによる発展戦略の実施を加速するために、以下の通り決定する。

一、当事者が発明専利、実用新案、植物新品種、集積回路配置設計、技術秘密、コンピューターソフトウェア、独占などの比較的に強い技術専門性を持つ知的財産にかかる民事事件の第一審の判決、裁定に不服があり、上訴を提起した場合、最高裁判所より審理するものとする。

二、当事者が発明専利、植物新品種、集積回路配置設計、技術秘密、コンピューターソフトウェア、独占などの比較的に強い技術専門性を持つ知的財産にかかる行政事件の第一審の判決、裁定に不服があり、上訴を提起した場合、最高裁判所より審理するものとする。

三、すでに法的効力が生じた上述した事件の第一審の判決、裁定、調停書に対し、法により再審、抗訴などを請求した場合、審判監督手続に適用するものは、最高裁判所より審理するものとする。

四、本決定の施行が3年満了した場合、最高裁判所は全国人民代表大会常務委員会に本決定の実施状況を報告するものとする。

五、本決定は2019年1月1日より施行する。

出所：中国人大網
期日：2018年10月26日

李克強総理　第1回中日第三国市場協力フォーラムで、「中国は知的財産権をより厳しく保護する」と表明

10月26日午前、国務院の李克強総理と日本の安倍晋三首相とともに、第1回中日第三国市場協力フォーラムに出席した。李総理はフォーラムの挨拶で「中日双方は第三国市場で悪性競争をせず、代わりに補い合いの優勢をさらに発揮し、協力の空間をさらに開拓し、第三国市場でウィンウィンウィンを実現するという願望を表明するために、我々は本日第三国市場協力フォーラムを開催しました。」と表明した。中日両国が経済面で強い補い合いの性質を有し、第三国市場における協力を展開するだけではなく、さらに中日協力の巨大な潜在力を発掘する必要があると示したうえで、たな対外開放をさらに拡大し、より公正な監督管理を推進し、知的財産権を厳格に保護し、市場化され法治化され国際化されたビジネス環境を創出するとも示した。

「中国は新たな対外開放をさらに拡大し、より公正な監督管理を推進し、知的財産権を厳格に保護し、市場化され法治化され国際化されたビジネス環境を創出する日本を含む諸国企業が投資・創業のために中国に来るのを歓迎します。我々も通貨スワップなどを通じて日本との金融協力を強化し、双方の企業の協力に支援を提供したいと思います。」

現在、世界経済の不確定性が増加する背景で、中日両国の協力は、自由貿易は公平な貿易の前提であり、公平な貿易は自由貿易の発展を推進しつづけるということを世界に表明できる。「貿易の発展と繁栄は、人民の福祉の改善のためになるだけではなく、世界の平和と安定の維持のためにもなります。」

出所：国家知識産権局
期日：2018年10月29日

津国先生とリンダの対談録
—私を動かした言葉—

特許業務法人 津国
会長　弁理士　津國　肇
北京林達劉知識産権代理事務所
所長　弁理士　劉　新宇

前書き

こんにちは。赤や黄色に染まった葉に、深まりゆく秋を感じている今頃、皆様と對談録の形で再会できてとても嬉しく思います。今日は皆様に津国先生との対談録をご紹介します。実は、本日の對談録は、これまでご紹介させていただきました青木先生、または佐藤先生との對談録とほぼ同じ時期で完了したものです。その後、あっという間に一年半以上も過ぎました。人間も、社会も、時には、ある瞬間、ある季節に、ある思い、ある話題が喚起され、そして、その後の何時頃かに何かのきっかけで、これらの思いや考えを再び胸に浮かび、思わずに共鳴を覚え、あの時、あの場のイメージが湧き上がりましたでしょう。津国先生と知り合ってから間もなく二十年も経ちます。私も信念・情熱・夢を持ちながら、無鉄砲、無知なの若者からごましお頭の知天命の年になってきましたが、いまだに相変わらず、自分の成長を期待して、林達劉事務所の次世代の若者、知財業界の次世代の若者の逞しい成長を大いに期待しています。津国先生が、昨年、私のインタビューを受けた時、七十年の人生の旅に自分を動かした大切な言葉を一気に教えてくださいました。文章の幅の制限がありますので、その中の一部の内容をまとめて、皆様にご紹介いたします。皆様にとっても、少しでもご参考になれば幸いです。私自身もこの先の20年、古希の年を迎える時、今の津国先生と同じように自分の感じたことを知財業界の次世代の皆様にいろいろお話ができればと願っております。

リンダ　2018年10月31日より

リンダ：本日はお忙しいところ、私のインタビューをお受けくださり、ありがとうございます。先生のこれまでのご経験の中から、先生の人生に大きな影響を与えた言葉があったと思いますが、今日はいろいろ伺いたいと思います。どうぞ、よろしくお願いします。

津国先生：確かに言葉は人を動かすと思います。私の場合は、言葉によって、いろいろ動かされてきました。ですから、私を動かした言葉が、こんなに沢山あったことを本日はご紹介させていただきたいと思っています。

リンダ：分かりました。先生、どうぞ、よろしくお願いいたします。

津国先生：私たちの職業にとって、言葉は、最も大切なものの1つです。言葉一つで、人々を説得したり、それによってお金を貰ったりしていますが、一つでも間違えたら大変なことになります。ですから、言葉は、私達にとって非常に大切なものです。

リンダ：本当に、時として一句の言葉だけで、全てがおしまいになるというリスクがありますよね。

津国先生：あります。ですから、今日は言葉についてお話ししたいと思います。最初、「IP処世十二訓」をご紹介します。私達はIPの世界に生きていますから、こういうことを心がけて、私達の職業を全うしなくてはいけないということを、いつも頭に刻み付けて生活しています。ですから、私は、この「IP処世十二訓」をいつも書斎に掛けております。本当は十三訓ですが、十三番目のものは秘密です。男尊女卑のような内容ですから、ある人から「リンダ先生に、それを教えては駄目だ」と言われましたので、十二訓になりました。十三番目のものは後でそっと教えます。

リンダ：本当ですか。それでは、是非、内緒で教えてください。

津国先生：一番目は、「夢と勇気を持ち続け、some moneyを大切に追い続けることができるか？」ということです。私達の職業には、夢はとても大切であると思います。それから、特に勇気が必要です。some moneyはビジネスなので、大切にしないといけません。これは、チャールズ・チャップリンという平和を説いた英国のコメディアンが言った言葉です。チャップリンはイギリス人ですが、スイス南部のヴェヴェイ（Vevey）というところで晩年をすごし、そこで永眠しています。私は女房と一緒にヴェヴェイに行きました。これが私の一番目の処世訓です。

次は皆さんにも共感してもらえると思いますが、「人間と命を大切に、明るく健全な心身を鍛え続けることができるか？」という言葉です。いつも健康で、明るく、体もしっかりとしていないと、判断を間違えてしまうということなのです。私達は判断をするという仕事をしています。ですから、判断する時に健康でないと駄目なのです。

私達は特許を扱います。いろいろな技術が沢山出てくるのですが、嫌がらないで、どんな技術も一生懸命に勉強して、その生きた知識の習得に命がけで取り組まないといけません。ですから、三番目は「科学技術を幅広くとらえ、幅広い科学技術の生きた知識の習得に命を削ることができるか？」ということです。私の専門は化学ですから、化学以外はやりませんとか、バイオですから、バイオ以外はやりませんというのではなくて、いろいろな技術を全て勉強しないといけないのです。年を取るにつれて、長い時間の中で一つずつ自分のテリトリーを広げていくことが非常に大切なことになると思います。専門も大事ですけど。お客さんのために仕事をしていますから、お客さんは多様な仕事を持ってこられますので、それに応えることが必要だと思います。そのためには、自分はバイオしか知らなくて、ほかは何も分からないというのではなくて、少しぐらいなら機械も、医薬も、化学も分かりますし、ソフトも分かりますということが必要であると思います。少しずつこのように時間を掛けて、自分のテリトリーを広げていくというのが大切なことかなと思ってやってきました。

その次は「現状に甘んじることなく『もう一歩』の気持ちを持ち続けることができるか？」ということです。すこしでも前にという積極的な気持ちを持ち続けることが大切です。もうここで止めておくというのではなくて、少しでも前に、という気持ちが大切です。ですから、「もう一歩」という言葉が好きです。

リンダ：梅田さんの本の中にもこの言葉が書いてあります。先生と同じように「もう一歩」と書かれていました。

津国先生：そうですか。後は、リンダ先生も心掛けて十分やってらっしゃると思いますが、私達は職業を通じて、沢山の国の人たちといろいろな形で交流ができます。ですから、中国だけとか、日本だけとかいうように、閉じこもらないで、「地球を丸ごと自分の仕事場とすることができるか？」という気持ちが大切です。これが5番目のもので、日本にいても、中国にいても、アメリカにいても、ヨーロッパにいても、皆同じで、別に中国人だから、日本人だから、アメリカ人だからなどと、区別することがなく、地球を丸ごと自分の職場にする気持ちが大切なのです。

それから、私達にとって、お客さんが大切ですから、お客さんを大切にしましょうということで、六番目は、「顧客を大切にしながら、緊張関係を持ち続けることができるか？」ということです。ただ、大切にするからと言っても、お客さんをいつも持ち上げるばかりではなくて、いつも緊張関係を持つ必要があります。よくお客さんに甘えたりする人がいますよね。 沢山の仕事をくれ、お金をくれる時、緊張関係がなくなりがちですが、その時もやはり緊張関係を持ち続けることが大事です。お客さんを下に見てもいけません。同じ目線でいつも緊張しながらやって行くことが大切です。

後は歴史の見方だと思いますけど、時間というものです。今ここでよければよいということではなくて、長い時間軸で物事を見て、判断することが必要です。それと同時に、距離も短い距離だけじゃなくて、遠い宇宙のかなたまで見つめるというような気持ち、広い見方も大事ではないかと思います。ですから、七番目は、「超長い時間軸と距離軸で物事を見て、判断することができるか？」です。

それから、私がずっと長い間心掛けてきたのは、知的財産（intellectual property）と国際平和（international peace）を関係づけることです。両者はともにIPなんですね。ですから、八番目は、「知的財産を国際平和と結びつけることができるか？」というものです。つまり、知的財産を通じて、国際平和に少しでも貢献できるかということを考えるのが必要だと思います。特に特許では、例えば中国で、私達のクライアントに特許権が発生すると、中国と日本が戦争するということは少なくなるのではないでしょうか。お互いにその国に自分の財産権を持っていたら、戦争すると財産権が全部駄目になってしまうので、知的財産権をお互いが持ち合うことは、戦争を抑止することになるのです。それから、リンダ先生とか魏先生とか、中国の皆さんといろいろ交流すると、友達が沢山増えますし、友達がいる国とは、仲良くしたい気持ちが生じて、戦争したいとは思いません。ですから、IPを通じて、お金儲けとかビジネスだけではなくて、国際平和に少しでも資することができるという視点が必要なのです。つまり、IPは平和のツールではないかと思います。

リンダ：本当に素晴らしい考え方ですね。

津国先生：それから、私達に責任が当然にあります。責任を忘れたらプロとしては失格ですから、九番目は「責任を大切にし続けることができるか？」ということです。

そして、十番目は、「細かい実務、事務手続きにも注意深く対応することができるか？」です。だんだん年をとったり、偉くなったりすると、昔はやっていた細かい実務とか事務手続き等を人に任せっぱなしになってしまうのですが、そういうことにも注意を払ってうまく対応することも、忘れてはいけないことです。

さらに、十一番目は、「文字や文章を大切に磨き続けることができるか？」ということです。文字とか、文書とか、言

葉とかをいつもブラッシュアップすることにも細心の注意を払うことが必要なのです。よりよい言葉、より説得力のある言葉、より人を動かすことができる言葉を上手く使えるかということをいつも考えることが必要です。

リンダ：常に勉強することですね。

津国先生：そうです。十二訓の最後は、「人生に浮沈ありとの思いを心に、沈んだ時こそチャンスととらえ前進することができるか？」です。人生にもビジネスにも、どうしても浮沈があり、良い時もありますし、悪い時もあります。悪い時には、投げ遣りになったり、逃げ出したり、責任転嫁したりしがちです。しかし、悪い時こそ、むしろ何かチャンスがあるので、チャンスを探して前進することが大切なのです。

リンダ：まだ乗り越えられると自信を持つことですね。

津国先生：苦しい時も悲しい時も困った時も、意気消沈したり、もう駄目だと思ったりしないで、何とかなると、何とかしようという気持ちをいつも持って、工夫することです。苦しい時にチャンス到来とウェルカムの気持ちを持つこと、心がけ次第です。以上が、事務所を経営したり、弁理士として長くやってきた私の一種の集大成のようなものかなと思っています。いつも私は書斎に掛けて、朝起きてこの「IP処世十二訓」を読んでいます。

リンダ：これから私も読みます。

津国先生：こういう私の処世訓を集大成したプロセスがあって、私を動かした言葉があるのです。最初のものはチャップリンが言った言葉ですが、それぞれ私にとって意味がある言葉です。私はリンダ先生のような、立派な本などをお客さんに差し上げていませんが、社内報があり、所員の皆さんだけに、私の考えをまとめた随筆のようなものを配ったことがあります。その表題は「私を動かした言葉」というもので、その1から15までがあります。

リンダ：なぜ本にしなかったのですか。

津国先生：本にしてもいいですが、親しい人に、そっと差し上げています。ただ、中には面白い言葉があり、笑われるかもしれません。例えば「はたらきなされ！」という言葉がありますが、「働きなさい」という意味の言葉です。つまり、働くということは、「はた（端、傍）」は側という意味で、「らく」が「楽（らく）」にすることなのです。ですから、働くということは、周りを楽にすることだと教えられました。周りを苦しめてはいけません。自分が働くことによって、周り、「はた」を楽にするというのが働くことなんです。それに先ほど言った「もう一歩」の言葉も私が大切にしています。日本の作家に武者小路実篤という先生がいますが、こういう詩を残しています。「いかなる時にも　自分は思ふ　もう一歩　今が一番大事な時だ　もう一歩」。これだけの言葉です。「もう一歩」という気持ちは今が一番大事だという気持ちです。ずっと過去から、今、そして将来もあるけれど、今が一番大事なので、これを大切にしてもう一歩前に進みましょうという意味なのです。私達が学生（寮生）の時に、武者小路先生が寮に来られ、この言葉を仰ってくれたのです。それ

で私達はこの言葉を大切にして、今でも寮の卒寮生達は「一歩会」という名前の会を作り、時々集まっています。とてもいい言葉です。

二番目もとても好きな言葉ですが、「ストレスためずに金ためよ」。よくストレスだけためて苦しんでいる人がいますが、そんなことしないで、金をためなさいという教えです。簡潔ですけど、非常によい言葉です。

リンダ：そうですね。ストレスを忘れることですね。

津国先生：これは我が家の家訓です。私の家族は「ストレスなんかをためないで、金をためてください。そして、私達にください」と言っていますが、それでいいのです。ストレスだけためて、愚痴を言ったり、悲しんだりしないで、それよりどんどんお金をためなさいという面白い言葉です。それに、経営をやっていると、赤字が時々発生します。「これはいけません。赤字を出しては経営者としては失格だ。赤字を出すんだったら、金を出しなさい。皆さんに給料をあげなさい。赤字を出したら、経営は破綻します」と言ったのも私の家族です。

リンダ：本当にいい言葉ですね。

津国先生：それから、次は私の師匠、弊所の前身、吉田特許事務所の創設者である吉田茂先生から40年前に「お金はお金で、お金を儲けることだけをやっては駄目で、やはりいい仕事をすれば、お金は後ろから付いてきますよ」ということを教えてもらいました。「金を追うより、仕事を追え！」という言葉です。

三番目について、リンダ先生もご存じだと思いますが、私が非常に大切にしている言葉です。私達は年々年齢を重ねて、年を取るではないですか。「青春とは年ではない」ことを詠った詩です。アメリカのSamuel Ullmanという人による「Youth」という詩は沢山の日本語訳があるのですが、私が好きな箇所は、「Youth is not a time of life, it is a state of mind」という最初のところです。日本人もこの言葉を知っている人が多いです。Samuel Ullmanはさほど有名ではない政治家だったのですが、日本が敗戦し、日本を統治していたマッカーサー元帥が、その散文詩を日本に持ってきて、執務室に置いていたそうです。日本の官吏がそれを見て、マッカーサー元帥にその写真を撮らしてもらい、英語を読める人が日本語訳にしたというわけです。知識人なら殆ど知っています。青春は年齢ではない、16歳であろうと、76歳であろうと、その人の気持ちのことを言っているのです。年を取ったから青春が去ったと思うのは間違いなのです。76歳でも前向きな気持ちや理想を持って、好奇心を失わない人は、いつまでも若いということを言っている素晴らしい詩です。リンダ先生も読まれるのでしたら、英文のほうがいいでしょう。私も英語のほうが分かりやすいです。しかし、松永安左衛門という電力翁と言われる人が翻訳した日本語訳「青春とは人生のある期間をいうのではなく心の様相を言うのだ」は格調高い名訳で、多くの人に広められたと言われています。後は、これはちょっと著作権侵害みたいなのですが、ある「おみやげ屋」で見つけたもので「青春とは人生のある期間ではなく、心の持ち方をいう」という簡略にしているものですが、なかなかいい味を出していると思います。

次は、私の親父は、私が3歳の時にフィリピンで戦死しました。ですから戦争に対して思いがあります。私はフィリピンで生まれ、3歳の時に無言の帰宅をした親父が出征前に母に託したアルバムの後ろの方に記されていた、私に残してくれた「肇へ」という言葉があったのです。「常に大丈夫の心をもってすすめ　腹は太く、気は人をのめ　注意は細かく、情はもろく　常に誠意なきものを嫌え　良き友を選べ」という言葉でした。非常に簡潔ですが、一番目は「常に大丈夫の心をもってすすめ」といつも駄目だ、駄目だと思って生きてはいけない、大丈夫だという心を持って生きなさい

と言うことなのです。それから「腹は太く」という日本語ですが、リンダ先生は意味が分かりますか？気持ちを大らかに持ち、こせこせしないという意味です。最後はちょっと一番私ができていないことですが、「注意は細かく」、「情はもろく」というのは、他人に対して優しい気持ちを持つという意味です。それから「常に誠意なき者を嫌え」と誠意のない人達とは交わらず、誠意のある、心のこもった人と友達になりなさいという意味です。最後に「良き友を選べ」がありますが、友達を選ぶことの重要性を教えてくれたのです。私はこの親父の遺言を大切にしています。

リンダ：素晴らしいお父様ですね。

津国先生：親父は私が3歳のときに戦死したので、よく覚えていません。残していたのはこの言葉だけですよ。後はおふくろから聞いている話だけです。戦争に行く前ですから、大変だったと思いますが、なぜかこれだけを残してくれたのです。私にとって唯一の親父が残してくれたものです。ただ、いい言葉だなと思って、今では殆ど暗誦できるようになりました。ちょっと恥ずかしながら、親父が残した言葉を書きました。

　その次は、「祈りなき行動は妄動であり　行動なき祈りは妄想である」という中国で学んだ日本の高僧空海こと弘法大師の言葉です。私は、弘法大師のことをとても尊敬しています。高等学校が高野山の近くだったので、私はよく高野山にも登りました。この言葉の意味は、お坊さんはお祈りするではないですか。でも、お祈りするだけでは駄目で、動いただけでも駄目で、何か行動だけしていては駄目で、静かに考えた上で行動することが大切だと言っているのです。次に行動しないで祈っているだけの人がいるわけです。頭でっかちで考えるばかりで、行動しない人もいるのです。「皆さん、こうしなさい、ああしなさい」と指図したり、教えたりするだけで、自分が動かない人がいるわけです。ですから、いつも祈りを大切にしながら行動して、行動を大切にしながらお祈りすることが大事だと言っているのです。闇雲に動くのは妄動で、祈りだけやっている人は妄想だと言っているところが面白いところです。頭でっかちで、勉強だけして何も行動しないのは、駄目だと言っているのです。

リンダ：先生、考えたら、これ以上いい言葉はありませんね。

津国先生：私もそう思います。弘法大師は本当に良い言葉を残したのです。弘法大師の生活は、僧侶としても、中国から修行して密教を持ち帰り、広く布教するために、全国各地を回りました。この方は技術者でもあったのです。日本全国に弘法大師が掘った井戸がたくさんあります。つまり、井戸を掘る技術を持っていて、水を出して人々の生活を豊かにしたのです。それからお医者さんでもあったのです。いろいろなところに行って、病気を治したり、悲しんでいる人達を励ましたり、心理学者のようなところもありました。弘法大師は、技術者であり、医者であり、学者でもあったのです。そして、行動と考えを一緒に実践した哲学者でした。この言葉は、京都にある東寺というお寺でみつけたものです。東寺は、弘法大師が造営したお寺です。この方は、物事を実践するには政治も動かさなければいけないと考えたので、政治家とも交わっていました。理屈ばかり言って、お祈りだけしては、世の中を動かすことはできないです

よ。京都に行って、東寺を作って、そこから政治も動かそうとした、とても実践的で、素晴らしい生涯だったと思います。弘法大師は、東寺の講堂で多くの人にいろいろ教えを広めたのです。

リンダ：次回京都に行くことがあったら、是非東寺に行ってみます。

津国先生：次は変な言葉なんですけど、汪恵民先生が私のために書いてくれた短文の中に出てきた言葉です。中国のことわざだと思いますが、「滴水の恩を他人より受ければ、湧泉の水で報ずべし」という言葉です。

リンダ：とても有名な中国のことわざです。私も、よく知っています。

津国先生：汪先生は、私の事務所で一年間研修され、帰国され、その後、 李悦先生のお陰もあり中科専利商標代理有限責任公司の総経理になられました。その大本は、日本で勉強させてもらえたからだと、日本の皆さんの恩に報いなければならないとその短文の中にこの言葉を書いたのです。私は、とても良い言葉だと、中国の方もこのような言葉を大切にしていることを嬉しく思いました。受けた恩に報いるという気持ちは大切です。日本語では、「恩に報いる」という言葉がありますが、中国のほうはもっとすごいです。「一滴の恩を湧泉の水で報ずべし」ということわざは本当にすごいです。

その次もとても面白い言葉です。私が尊敬しているジェームズ・アレンという人の本に、『As a man thinketh』という本があります。読まれたら意味が分かると思います。私はその英文も和訳本『「原因」と「結果」の法則』も読みました。ようするに、物事をやりとげるには、強い思いがないと駄目であるということなのです。強い思い、強い夢や憧れがあれば、人は実現することができるという意味の言葉です。

リンダ：いわゆる「Only the Paranoid Survive」ということですね。

津国先生：そうです。それが大事だと彼は教えてくれたのです。思いが柔らかだったら実現しません。やはり強い思いがあってこそ初めて実現することができるということなのです。

リンダ：先ほどの梅田さんの本の中に、日本のプロ野球の巨人の監督でいらっしゃった長嶋茂雄さんが言われた「わが巨人軍は永久に不滅です」という言葉があります。

津国先生：そうです。オリンピックの選手でも、自分は金を取るという強い思いがなければなりません。銀でいいとか、銅でいいと言っていたら、そのとおりになります。強い思いがあることが前提で、それに向かって努力することで、金メダルを取れるのです。このような思いがないといけません。

リンダ：夢をかなり強く持てば、信念も出てきますね。

津国先生：おっしゃる通りです。そういう信念とか、思いがないと、物事は実現しません。それがまず大切なことです。

リンダ：本当に、例えば家族が病気になったとしても、 二人の力で必ず乗り越えられると思わないといけませんね。

津国先生：そうですね。大丈夫だという思いがないと負けてしまいます。

リンダ：私の父は2016年4月29日になくなりましたが、父は病院に入院していたのですが、「私はできる限りの努力をした。これ以上頑張る必要がない。だから、家に帰る」と言って退院して、家に戻り、36日目に亡くなりました。でも、父が私に伝えたかったことは、「貴女も含め家族全員ができる限りの努力をして、私達はここまでやってきて、もう

勝った」ということだったと思います。ですから私も信念を持って、家族を支えることにしたのです。

津国先生：こういう言葉はそれ以外も沢山あるので、少し紹介します。例えばキリストの言葉だと「求めよ、さらば与えられん」とか、仏僧の言葉だと、「念ずれば通ずる」などがあります。とりわけジェームズ・アレンの『As a man thinketh』という本の中で、そこを強調して書いています。そして、この本は、「聖書」というバイブルがありますが、それに次いで読まれた世界で2番目のベストセラーなのです。私はずっと知らなかったですが、その翻訳が出版され、それを読んだ時、衝撃を受けました。ですから信念だとか、夢だとか、憧れだとか、思いを強く持つことは大切です。そうすると、人間は努力しますし、実現するという教えです。ジェームズ・アレンは「謎の哲学者」と言われ、若くてなくなられましたが、この偉大なる本を残したのです。

次は日本の言葉です。日本には「真実一路」という本がありますね。ところが、私はある温泉に行く途中、「本分一路」という言葉を見つけたのです。これはまさに私達の職業の意味を表しています。若い頃は、自分の職業を決めかねて、ほかの職業がよく見えたりして、少し別の道に進もうとか、いろいろ迷いますね。でも、一度決めたら、その道をずっと進んで行かなければならないのです。つまり、本分なんです。私は弁理士です。この本分を大切にするという気持ちを表した言葉です。

リンダ：本気道ですね。

津国先生：本気道です。政治家になればよかったとか、大学の先生になればよかったとか、若い時には特に迷うものですが、一度決めたらもうその道をひたすら進んで行きなさいという意味の言葉なのです。

リンダ：魏先生から私は、「貴女には別の才能はないです。生きることは貴方の本業です」と言われました。

津国先生：そうかもしれません。とにかく本分というのを早く自分で考えて、体得するですね。そして一度決めたら、ひたすら行くという教えですが、なかなかできないものです。ですから、私も、「やはり、会社員になればよかったな」と時々言うわけです。

リンダ：先生もたまに思われますか？

津国先生：思います。というのは、友達の中には、会社で社長とか、偉くなったやつもいるので、私もあの会社に残っていたら、今頃は社長になっていたかななどと思うわけです。もし（IF）という言葉がありますが、もしもそうだったらと考えることは、人生では駄目なことです。人生は1本道しかないから。もしもそうだったらと言ったら、過去のことになってしまうからです。「もしも私が会社に残っていたら、社長になったかもしれない」と言ったら、それは過去のことになります。それより、今、自分は弁理士なので、この道を進んでいこうと思わないといけないという教えなのです。それを実践した土川さんという方、弊所におられました。土川さんは、ある家電メーカーで研究開発畑を歩かれ、その後シリ

コン樹脂の日本メーカーで特許部長をされ、その後その勤勉さをかって弊所に来ていただいた方なのですが、その人は今でも私は忘れることができません。根っから知的財産が好きな方で、よく働くのです。リンダ先生の事務所にもいるかもしれませんが、仕事が好きですから、メーカーの特許部長であった時、休日出勤手当ては要らないといって、土曜日も日曜日も出社するので、部下が心配するわけです。そして、土川さんの部下が私のところに来て、部長に働かないように進言してくれと頼まれたわけです。私にとっては、クライアントの会社の部長に進言することは、失礼だと思ったのですが、一緒に食事をした際に申し上げたのです。すると、土川さんは、「暇で時間もあるし、好きでやっているのですから」と仰いました。全然病気にもなりませんし、疲れも知りませんでした。会社時代はずっとそうでした。定年退職して弊所に来ていただいてからは、奥様と土日ぐらいゆっくりされるだろうと思っていましたが、やはり同じベースで、毎日働いていました。だから、他の所員が「土川さんをあんなに働かせていいですか」と、皆が心配していましたが、本人は好きだというのです。つまり土川さんはこれが本分だと仰ったのです。仕方がないと思っていましたが、日曜日になると事務所に一人だけになってしまい、お年もそろそろ70歳近くになっていましたので、「もう日曜日は出勤したら駄目だ」と伝えたら、確かに日曜日は出勤しなくなりましたが、土曜日に出勤していましたよ。この文章は、土川さんが弊所を退職された10年ぐらい前に書いたものです。

次は、私は田舎の町を歩いていた時に、ふと目にした「汗かけ　べそかけ　恥もかけ　人生全て　経験だ」という言葉です。何か変な言葉ですが、深い印象に残りました。まず汗をかきなさい。一生懸命やって汗をかくぐらい働きなさい。そして、べそをかきなさい。べそは、日本では失敗した時の恥ずかしい気持ちを言う言葉ですが、失敗もしないような人生はだめだと言っているのです。汗もかき、べそもかき、恥もかくことが人生全ての経験になると言っているのです。誰が書いたのか分かりませんが、多分田舎の和尚さんか、先生をしていた人が綺麗な字で書いて貼り付けたのだと思いますが、深い印象に残りましたので、書いたのです。特に若い時こそ、恥をかくことも必要だという私の気持ちを書きました。人生全てスマートに、失敗しないで、恥もかかないで行っては駄目なのです。

それから、これは、私の尊敬する第5代国鉄総裁の石田禮助氏が仰った「粗にして野、されど卑ならず」という言葉です。日本のJRは昔「日本国有鉄道」で国鉄と呼ばれていました。国鉄は国有ですから、働く人は全員男しか入れず、女性は一人もいませんでした。それからストライキが起こったり、賃金が安かったり、とにかく赤字続きで、疲弊しきっていたのです。それをこの石田さんという人が救済してくれたのです。国鉄の職員は当時45万人がいましたが、よく労働争議をやって、ストライキをやって、駅が汚なく、事故も多かったです。この国鉄を引き受ける人がいなかった時、当時78歳であった石田さんが手を挙げて自ら総裁を引き受けたのです。そして、総裁に就任後、国会に呼ばれた際に仰った言葉なのです。この人は野人でした、gentlemanでもありませんでした。こういう時に、gentlemanが出てきても多分日本の国鉄は再生できなかったと思います。猿のような人で、荒っぽい石田さんだったからできたのです。その時、彼は国会議員の前で、「俺は確かに荒っぽい、粗雑であり、野生です。だけど絶対卑しくない。お金とか賄賂とかには一切動かされない」。と言ったのです。当時の国会議員は皆スマートで、gentlemanで、教養があり、学問も高かったです。

リンダ：それは、1960年代のことですか。

津国先生：その頃です。石田さんが国鉄総裁をやられたのは、1963年から1969年でした。国家議員は皆スマートでしたが、何もしませんでした。皆他人に責任転嫁して、誰も行動しなかったです。その時、この人がいました。「俺は少

し荒っぽくて、野生だけど、貴方達のようにお金で動いたり、賄賂を貰ったり、地位に憧れたりすることは、一切しない。任せてください」と皮肉を込めて言いました。ところが、誰も当時78歳だった石田さんができるとは思っていませんでしたが、最後見事にやり遂げたわけです。そして今のJRになりました。今のJRがあるのは、石田さんのお陰なのです。

リンダ：その時石田さんは既に78歳だったのですね。

津国先生：そうです。そして6年間の総裁任期をかけて、見事にやり遂げた時は、85歳でした。その当時、国はそんな大きな仕事をやり遂げた石田さんに対して、勲章をあげ表彰しようとしたのです。しかし、石田さんは、「いらない」と言いました。この人は、生涯一個も勲章を貰いませんでした。そして、「私はマンキーだ」と言うのです。猿ではなくて、英語で「私のことをマンキーと言って下さい。ただ、モンキーじゃないです」と言ったのです。つまり、この人は英語の達人で、誰よりも上手い英語で外国とも交渉できたわけです。「マンキーに勲章はいらない」と言ったのです。「だって、猿が勲章をもらったことはないでしょう。」こう言って、皆断りました。

リンダ：つまり名誉のためにしたのではなかったのですね。

津国先生：その通りです。そして、国鉄を変えてJRにしたわけです。名前も変え、女性職員もどんどん入れました。今のサービスは全然違うでしょう。それまで、国鉄職員には女性は絶対いれないと言ってましたが、石田さんは「お客様の半分は女性です。だから、女性職員がいないと国鉄は改革できない。」と言って、国鉄を改革しました。今では、駅長さんも職員も男性と女性の割合がほぼ同じくなりました。そして、国鉄が全国一緒だと駄目だと言って、分割したのです。そして新幹線の開通式で初めて発車させたのも石田さんでした。本当に面白い人でした。もともと石田さんは企業にいて、三井物産の社長でしたが、引退して田舎に引っ込み、78歳まで畑を耕していたのです。そして、国鉄改革の際、石田さんしかできないと白羽の矢が立てられ、呼び出されたわけです。それに対して、石田さんは勇敢に「任せてくれ」と言ったのです。

リンダ：まさか今の稲盛さんみたいですね。

津国先生：稲盛さんもそういう改革者ですが、国鉄は45万人もいましたので、もっとひどかったです。国有で、北海道の先から鹿児島の先まで、腐りきった集団でしたが、この人が見事に指揮して、改革をやり遂げたのです。まず、分割して、それぞれが独立して、「きちんとやりなさい。女性も入れなさい。サービスもしなさい。新幹線も走らせなさい」と一つ一つ改革していったのです。新幹線の開通式で、テープカットもしましたが、最初は辞退していたのです。しかし、「貴方しかいない」と言われ、しぶしぶテープカットをしましたが、終わるとさっさと帰ってしまいました。6年の総裁任期終了後は、田舎に帰ってまた畑をしました。このように面白い人でした。所謂「卑ならず」です。「卑」とは、卑しいという悪い意味ですが、自分はそうではないと言ったのです。

その次は、弁理士にとって非常に大事な言葉です。当時世界的にも有数な化学会社チバ・カイギーという会社がありました。今はノバルティスとか、BASFに呑みこまれ、会社自体がなくなってしまいました。その会社の特許部長であったDr.Hueney(ヒューニー博士)が言った「人は過つ、されど、二度同じ過ちを犯してはならない」という言葉です。特許も同じです。一回はミスが起こるのは仕方のないことですが、二回やったら絶対だめだと、このヒューニー博士が私に言った言葉です。それは聖書の言葉に書いてある「Human err, Devils err twice」という言葉で、二回やるやつは悪魔だと言っているのです。ヒューニ博士は、「一回の過ちは人間のなせることで、ヒューマンですから過ちがあります。しかし、同じ過ちを二回やるやつはDevilsで、知性がないのです。一回目の過ちを大切にして、二回目を起こさないように工夫することが大事です。特許も同じで、ミスはあるはずです。わが社の案件にミスが起こった時はすぐに言ってください。それを隠し立てしたり、自分で勝手に直したりしないでください。何もしないですぐ私のところに来てください。何とか調べて、直す方法を考えるとかする人がいますが、そんなことはしないで、一回目は大丈夫ですから、事務所の中でもう一回教育したり、システムを整えたり、いろいろなことを考えたりして、二度と起こさないように考えてください。」と言われたのです。これがヒューニー特許部長からの要請でした。これは聖書の言葉で、本当にいい言葉です。

その次は、小田原にあるお寺の入り口に書かれていた「ほほえみは人一代の身だしなみ」という言葉です。人と出会った時、ほほえみは非常に大切で、難しい顔をして、お客さんとかお友達に会うよりも、いつもほほえみをたたえていたら、相手もいい気持ちになりますね。ほほえみは、服とか、おしゃれと同じように、「身だしなみ」だと言っているのです。リンダ先生が綺麗にしていると同じように、よく女の人で、綺麗な服装を着ているのに、顔はいつも硬い表情の人がいますが、あれは駄目です。やはり、柔らかい顔をしてほほえんでくださいということを言っているのです。

リンダ：その通りですね。ほほえみは大切です。

津国先生：リンダ先生は一番ほほえんでいると思いますよ。男も同じで、難しい顔をして真面目ばかりでは駄目です。服装も大切ですが、顔の表情もにこやかにしているのは大事だと、女房にもいつも言われています。

リンダ：厳しい奥さんですね。

津国先生：次は、ナポレオン・ヒルという人が書いた面白い本にある「行動より知識を大切にしすぎると物事はうまく行かない」という言葉です。つまり、知識よりむしろ行動のほうが大切で、完全に理解してから行動を起こしていると、スピード感がなくなるので、行動しながら考えることの重要性を言っているのです。それがビジネスを成功に導く非常に大切なことだと、その本『巨富を築く13の条件』の中でも強調しています。巨富ですよ。お金持ちになりたかったら、この13の条件を実行しなければ、絶対にお金持ちになれません。物事を達成しようと思ったら、行動しながら考えること、考えてから行動していてはスピードがないといってる言葉で、本当によい本です。

リンダ：完璧な案だけを考えるより、取り合えずスタートするわけですね。

津国先生：そうです。とりあえずスタートして、行動しながら考えて、修正もするわけです。それが非常に大事です。リンダ先生はこの本を読みましたか。

リンダ：この人のほかの本を読みましたが、この本は読んでいません。

津国先生：所謂ビジネスをやる時の成功を導くにはこうすべきだという非常に大切な教えです。どうしてかというと、ナポレオン・ヒルはカーネギーに師事したのですが、カーネギーのところに行って、「私は何すべきか」と尋ねたら、カーネギーはナポレオン・ヒルに対して、「500人の成功者を訪ねなさい。その間給料も出しますので、500人の成功者に会って、成功の秘訣を教えてもらってきなさい。その人達が持っている資質、どういう考えて、どのように行動して成功したかをまとめて、私に報告してください」と答えたのです。それでナポレオン・ヒルはカーネギーから沢山のお金を貰って、約10年かけて500人を訪ねました。そして、その中から成功のルールというものをまとめました。つまり実証したわけです。

最後の十五番目ですが、ドイツの有名な哲学者ニーチェが言った「始めなければ、始まらない」という言葉です。当たり前なことですが、非常に大事なことです。誰かが何事も「やりましょう」と言わないと、皆が「誰かがやるだろう」とか、「私は少し後でやる」と思っていたら、全然何も起こらないので、誰かが勇気を持って始めないと、始まらないと言っているのです。始めることによって、初めて高い理想とか、いろいろなものが達成できるのだと言っているのです。

リンダ：素晴らしいです。

津国先生：この文章は長くて、なかなか読みにくいかもしれませんが、言葉はそれぞれに面白いです。梅田さんの本の中に同じことも言っているかもしれませんね。

リンダ：津国先生のように本の中に沢山書かれていません。

津国先生：言葉は人を動かすので、非常に大切です。私はいい言葉を見つけると、いろいろ書き留めて、集める癖があり、思いついたときに、手帳などにすぐ書き記しているのです。

リンダ：いい習慣ですね。

津国先生：例えば最近、この言葉を気に入っています。手書きですが、「青い熊」というものです。まず青いの「あ」は、「焦るな」という意味で、ばたばたしてはだめで、落ち着いてしなければ駄目なのです。

リンダ：私は今回日本に来る前に、上海に寄りましたが、上海のある弁護士の友達から、「リンダさん、歩く時結構力が入っていて、焦っているように見えますよ。特にハイヒールの音がバンバンして、他の人が聞いたら、何でこんなに緊張しているかと思われますよ。リンダさんらしくありませんよ。ゆっくりしてください」と言われました。

津国先生：そのとおりです。焦っては駄目です。落ち着いてゆったりすることが大切です。次は「青い」の「お」で、「怒るな」を意味しています。人は怒っては駄目なのです。そして、「い」は「威張るな」で、「熊」の「く」は「腐るな」という意味です。難しいことがあったり、負けたりした時、駄目だと思うではなくて、腐らずに頑張る気持ちを持って、次の時に

挽回しようと思うべきなのです。だめだとか、生きたくないとか、自殺しようとか、そういうことを考えては駄目です。そして、最後の「ま」ですが、我々の職業は戦いでもありますが、「負けるな」ということなのです。それから自分自身にも負けてはいけません。「青い熊を探せ」と私は言ってますが、このような言葉を集めています。これは、日本のコロッケという物真似タレントがいますが、そのお母さんが、自宅の柱にこの言葉を張り、「青い熊を探せ」をずっと言っていたそうです。ですから、コロッケさんもこの言葉を胸に、九州の田舎から上京して、若い頃は本当に貧乏で苦労しましたが、修行して物真似名人になって、今では大成功しました。コロッケさんはお母さんから教わった「焦ってはいけない、怒ってはいけない。威張ってはいけない。腐ってはいけない。負けてはいけない、特に自分に負けないこと。」を胸に刻み頑張ったそうです。

リンダ：さわやかなお気持ちで全てのことに対応されていますね。

津国先生：これは最近の言葉ですが、時代は大きく変わっています。リンダ先生の事務所もそうですし、我々も同じですが、時代が大きく変化している時、手をこまねいて、時代は変わっているなと見ているだけではいけないと思います。「時代が変化する中にチャンスを見つけて、仕事をきちんとやっていくことが必要である。」という言葉です。最近、知財ビジネスも大きな転換期を迎え、例えば、AI（人工知能）というものが現れ、自動翻訳もAIがやるようになってきました。そうすると、弁理士の職業もだんだんAIに取って代わられるかもしれません。その時にどうしますか。AIをうまく活用して、ビジネスの中に活かすことなど工夫をしなければいけません。AIだけを憎んでも駄目です。そのように時代の変化をチャンスだと捉えてやっていくことが必要なのです。じっとしていては、チャンスがありません。変わる時こそチャンスです。こういう捉え方が大事だということは、私たちの職業でも同じだと思います。

それから、次の私が好きな言葉です。物事を作る人がいるでしょう。「何かを作っている人は、最高の使い手であるように作りなさい。」という言葉です。例えば意見書や明細書を書いている時に、お客さんの気持ちになって書くことが大切で、自分の自己満足だけのためではだめなのです。自分がお客さんの立場に立って見たとき、一番いい形になることをやりなさいということです。「作り手は最高の使い手になりなさい」という意味です。例えば、ろくろを回してコップを作っている人がいるとします。その人は作り手です。その使い手がこのように持つ時、一番持ちやすくていいなと思うように作りなさいと言っているのです。使う人のことをいつも考えなければばらないのです。自分の自己満足だけで、これは美しいな、立派なものができたなではなく、使う人のために喜ばれるかということを考えることが大切だというのがこの言葉の意味です。「作り手は最高の使い手になりなさい」と言う言葉は、陶器屋さんが言った言葉です。

次は「リーダーはどのようなものなのか」という言葉ですが、これは私の言葉です。リーダーを決める時、「お願いですから、リーダーになってください」と言ってやってもらうのは駄目で、この場合、この人はいいリーダーにはならないと思います。「私がやります」と、向こうから言ってくるような人にリーダーの素質があるのです。こちらからお願いしてなってもらうと、どうしてもお願いするほうに責任があるわけです。ですから、リーダーはお願いベースでなってもらうのではななく、やりたいと自分で手を挙げた人になってもらうべきなのです。いずれにしても、リーダーは、責任を取らなければならないので、覚悟が必要です。その覚悟を持って、リーダーとしての喜びをもって楽しむぐらいの余裕があるような人でないとだめです。それから、リーダーには責任感、プライド、そして何よりもポリシーがないと駄目です。リーダーにポリシーがなくて、皆の意見を聞いて決断するという民主主義では駄目で、誰もが納得するような意

見は駄目です。やはり自分が本当にいいと思う信念みたいなものをよく説明して、皆に分かってもらって進めていくことが大事です。我々も同じですが、皆仲良く、皆の意見を聞いて、全員でやりましょうというのは、リーダーなのです。これは私のリーダー論です。

もう一つの言葉を差し上げます。ある人から教えられたマハトマ・ガンディーの言葉です。「Keep your thoughts positive, because your thoughts become your words. Keep your words positive because your words become your behaviors. Keep your behavior positive because your behavior becomes your habits. Keep your habits positive because your habits become your values. Keep your values positive because your values become your destiny.」という言葉です。つまり全てポジティブ、ポジティブに行きなさいとガンディーさんは言ったのです。これは、私が大事にしている言葉です。

リンダ：その通りですね。そのようにすれば、最後は幸せになれますね。

津国先生：「大器晩成」という言葉がありますが、私は小器ですから、年を取って晩成したいという気持ちを表した「小器晩成」は、私のオリジナルの言葉です。大器晩成は無理です。大器にはなれませんので、小さくてもいいですから、晩年にね、小さいながら上手くいけばよいと思っているのです。

それから「継続は力なり」ですが、これは日本でもよく使われますが、物事は続けていくと力になります。やめてしまったり、切ってしまったりしては駄目で、何事も継続してこそ、力になるのです。何事も途中でやめたり、諦めたりすると力になりません。リンダ先生がこのビジネスを長く続けてこられたから、今林達劉は、世界の林達劉になれたのです。その継続してこられたことが力になっているわけです。

リンダ：イチロー選手も、「小さいことを継続すれば、今度とんでもない大きなことができる。」と言っていました。

津国先生：そうです。積み重ねていくことです。次は演歌の中に出てきた「負けて泣くより勝って泣け」という言葉です。負けて泣くのは駄目で、本当に何か成功して、嬉し涙を流しなさいということなのです。ですから、成功を勝ち取ることが何より大事です。負けた時に泣いたり、めそめそしたりしては駄目なのです。本当にいい言葉だと思いますよ。

リンダ：私にある友達に「リンダ、この二つの場合、良い友達と再会できた時と分かれる時は泣かないでください。なぜかと言うと、相手を安心させるために泣いてはいけません。自分は強く、楽しく生きたいからです。今までも楽しく、強く生きてきましたので、これからもっと楽しく、強く生きていくのですから。」と言われたことがあります。それを聞いて私は自分ができないと思っていましたが、最近自分もできるようになったと思うようになりました。父が亡くなった知らせは、私が出張先のドイツで聞きました。そこで一人で泣きました。でも、中国に戻り母と会った瞬間は泣きませんでした。母を心配させたくないから、一人の時に泣いたのです。

津国先生：なるほどです。

リンダ：ですから、先生が仰った通りです。勝った時に嬉しくて、泣くことは良いことだと思います。勝つためにいろいろ苦労してきたことは当然です。多分思わずに途中に色々なことを思い出します。

津国先生：そうですね。まぁ、集めている言葉はまだ沢山ありますが、今日一部をリンダ先生にお聞きいただき、とても嬉しく思っています。

リンダ：本当にありがとうございます。教えて頂いたお話を中国語に直して多くの中国人にもシェアさせていただきたいと思います。私も、本日多くのことを学ぶことができましたので、きっと多くの方の心にも響くものになると確信しています。

津国先生：恐らく中国でも日本でも同じではないかと思います。この気持ちとか、言葉とかいうものに対する感覚は万国共通であると思います。

リンダ：先生、本日は大変お忙しいところを、たくさん良いお話をお聞かせくださり、本当にありがとうございました。

津国先生：こちらこそ、ありがとうございます。

2017年4月　東京

（今回のIPNEWSに掲載している写真は、弊所法務部の雷亜芸弁護士が京都で撮影したものです。）

責任者：　代表取締役　弁護士　弁理士　魏　啓学（Chixue WEI）
社長　弁理士　劉　新宇（Linda LIU）
担当者：　所員　キン　英芳（Yingfang JIN）　張　輝（Ashley ZHANG）

北京林達劉知識産権代理事務所　企画室
(Business Development Department, LINDA LIU & PARTNERS)
〒100013　中国北京市東城区北三環東路36号 北京環球貿易中心C座16階
Tel：　86-10-5825-6596（WEI）　86-10-5825-6089（LIU）　86-10-5825-6366（代表）
Fax：　86-10-5957-5201（代表）
E-mail: ipnews@lindapatent.com
Website: http://www.lindapatent.com